



The title 'メディカル シスターズ' is written in a large, stylized, outlined font. To the left of the text is a silhouette of a woman in a nurse's uniform holding a long instrument, possibly a stethoscope. To the right is a silhouette of a woman in a nurse's uniform holding a small object, possibly a syringe. The background is white.

メディカル シスターズ

小説 さかき傘

挿絵 ピエール☆よしお

立ち読み版

第一章	ラブリーオペレーション　　～愛のお注射しちゃいます！～	006
第二章	スイートシスターズ　　～走る！　十萌姉妹～	023
第三章	ビギニングペイン　　～闇の中の二人～	051
第四章	ダークサイドインフエクション　　～様々な愛のカタチ～	086
第五章	ルナティック　　～狂愛する姉妹～	131
第六章	メイクラブシンδροーム　　～蜜月中毒の花嫁～	179
第七章	シスターズコンプレックス　　～いつも仲良し～	246

登場人物紹介

Characters



と も え ゆ ら 十萌 由良

星宮学園に通う、元気いっぱいの女の子。萌の双子の姉。悪の組織「マカイジュ」が現れると、魔法のナース戦士に変身して活躍する。

と も え ま り 十萌 萌

由良の双子の妹。由良とは逆に冷静な性格で、成績優秀だが、運動だけは苦手。由良とともに魔法の女医戦士に変身し、悪い心を治療する。

お う じ て い ま 櫻時 帝魔

由良の憧れの陸上部の先輩。容姿端麗な少年だが、その正体は……。

み や し ろ ふ み や 宮代 文哉

十萌一家と同じマンションに住む青年。姉妹をいつもいやらしい目で追っている。

第三章 ビギニングペイン ～闇の中の二人～

床、壁、天井と、すべてがボコボコした黒い素材から作られた、人工物のようにも、くりぬかれた木の内側のようにも見える。大広間である。

「——ああっ！ マユちゃんだ……。マユちゃんがきた！」

「うわあおっ。マジだ、ホンモノだよ！ かつわいいくっ！」

下劣な嬌声に驚き、そちらを振り返る繭。そこにはプリンスと——、二百近い数の黒タイツ。彼女を信望するファンクラブ会員でもある、戦闘員たちが立っていた。

「ようこそ……。我らが魔界樹へ」

静かに言うプリンスに眼を向けたところで、繭はその怜悯な面立ちを苦々しげに歪める。その手に握られていたのは、白いナース服。だけだったのだ。まるで人を持つように恭しく両手で抱いていたが、持っているのはただの布きれに過ぎなかった。

「かかれ！」

畏に落ちて敵の本拠地へと単身踏み込んでしまった少女に対し、執拗なほど用心深い王子は、自分で前に出ることなく部下の戦闘員たちへと指示を出した。

「おっしやあつ！ 取り押さえろッ！」

「うおおおっ！ マユちゃんにさわるぞっ！ さわれるぞっ！」

許しが出たとたんに二百の男たちが一人の少女に向かって一斉に挑みかかってくる。

その光景に対して繭は直感的に顔を青くした。由良と離れた状況で敵の数が多すぎるこ

このままではらちが明かないと思い、服からハート形キャンディ・バーを取り出す繭目に留まった、大口を開けているサラリーマン風の男の口へと投げつけた。だが。

「おおおっ！ 噂のキャンディだ！ 俺によこせ！」

見事にサラリーマン風の男の口へと入ったのだが、直後それは隣にいたパンチパーマの中年に奪い取られた。噂の美少女ドクター特製の味を求めて数十人が奪い合いを始める。

キャンディはひと舐めすれば効果が現れ、戦闘員たちの悪の心を浄化し一般人に戻すはずだった。その薬を奪い合っているのだから、繭から見れば集団の自滅である。

「……つて……。え……。？ な、なんで……」

「あああつ！ もうなくなっちゃまったのかよ！ マユちゃん！ 俺にも俺にも！」

「こっちにもくれよ！ 俺、一口しか舐めてねーよ！」

サラリーマンやパンチパーマをはじめ、男たちは一人として浄化される気配がなかった。ファンクラブ会員たち——。彼らならばキャンディを舐めても、悪の心を穿つ薬用より

『マユ特製のキャンディを舐めた』ということで邪恋が高ぶり、心はより深い闇へと促進される。これこそプリンスが、彼らを対双子用戦闘員として育てた理由だった。

そして自分の力が効かない状況に、繭はかつてない混乱へと陥る。

「うそ……。どうして……」

「——悪いが、私も今度ばかりは遊んでいられないのだ」

焦りが生じさせた隙をつき、プリンスが少女のバックを、絶好の間合いで捕らえていた。血の凍るような感覚に肩を震わせるより早く背中にも痛烈な水平蹴りが入る。

「……………ッッは……………ッ」

背骨が折れそうになつて、肺からほとんどの酸素を吐き出しながら前方へと吹っ飛ばされる繭。そこにはいやらしく満面の笑みを浮かべた黒タイツたちが待っている。

一挙に伸びてきた数十という腕を、交わす手段はなかった。

「うほーっ！ マユちゃんだ！ これがマユちゃんの身体なんだ！」

「すげえ！ このおっぱい触ってみろよ！ ちっちゃいけど、あつたかいし柔らかけえ！」

「うわあ……。脚長いな。それにこのウエストの細さ！ 俺の半分もないぜ」

「……………ッッ！ ……ッッ！ ……ッッ！ ……ッッ！」

十人以上の力で床に押さえつけられ、ほんの数秒で全身のいたるところに男たちの手のひらが乗せられた。服の上からとはいえ、二の腕や腹部をガツシリと捕まれ、腿に頬擦りされ、萌えいでる前の胸丘から女性的な肉付きに程遠い腰までを指がなぞる。言語を絶する汚らしさの嵐に、潔癖症の乙女は悲鳴を出すこともできなかった。

だが助かったことに、男たちの狼藉はすぐやむこととなる。

プリンスが彼女の足元に立つと、戦闘員たちは残念そうに舌打ちしながらも場所を空けたのだ。なおも両手と両脚を組み敷いてはいるが、好き勝手に美少女の感触を楽しむよう

なことはしない。マカイジュから与えられたらしい戦闘員たちの腕力はかなりのもので、大勢が束になると繭の力では振りほどけないため、おぞましきには変わりがないが。

「……はっ……。——はっ……、……はっ」

姉が暗闇を怖がるならば、潔癖な妹の最も怖いものは『不潔なこと』だった。わずか数秒とはいえ心臓が止まりそうな経験をしたことで繭は、目元にうっすらと涙を浮かべている。とはいえその瞳は、怜悯で強靱な敵意を失うことなくデュマを睨みつけているが。

「——名誉会長。代表して服を脱がせる。事を為しやすいようにな」

「へへへ……。了解しましたよ。——さあみんな！ マユちゃんの開通式だぜ！」

名誉会長——。そう呼ばれて前に出たのは、黒タイツで小太りな腹がよく目立つ、趣味の悪いメガネをしたタラコ唇男だった。タイツは首までなので見覚えのある顔を見て、繭はぎよつとなる。

「繭ちゃん……。フランスの言った通り、やつぱり君と由良ちゃんがメデイカルシスターズだったんだな。俺がファンだつて知ってたんだから、教えてくれればよかったのに」

そこにいたのは紛れもなく、由良にとっては近所の優しいお兄ちゃん。繭にとって軽蔑すべき隣人の——。宮代文哉だった。明晰な少女は名誉会長と呼ばれた彼を見たときに、この戦闘員たちが自分らをメデイカルシスターズと呼んで崇めるファンクラブ会員たちであること。そして謎の組織統制者が、マカイジュの人間であることまでを理解した。

「——っあつ！ 貴方たち！ なぜマカイジュに味方するんですかっ！ やつらはあたしたちの敵——。ううん、人類全部の敵なのにつ……ッ！」

少なくとも自分たちを信望する以上、善なる部分は持っているだろう彼らに、必死で呼びかける繭。姉より幾分世の中を知る彼女も、純真な心を持つ乙女でしかなかった。自らの邪恋を満たすより大事なものがない、大人の男がいかにか汚いか、分かっているのだ。少女の熱弁に二百近い男たちは少し動揺したが、呼応する者はなかった。前に出た名譽会長にいたっては、ヘラヘラと笑うばかり。

「頭が固いなあ。俺たちは繭ちゃんが好きだから、楽しませてあげたいんだよ」

言いながら——、手をスカートの裾に這わせてきた。普段の冴えない浪人生とは違う態度で、口調からは情けないこもりが消え、戦闘員たちを統制する自信に溢れている。ぶるつと肩を震わせて気味の悪さを訴える繭に構わず、手を奥へ潜り込ませてきた。

長いスカートをめくり上げると、ニーソックスで膝までを黒生地を覆った脚のラインが覗けた。無駄な肉もなく、スポーツが苦手で筋肉ばつてもいない、すらつとした華奢な美脚。スカートと靴下の黒さが、腿の白さをゾツとするほど妖しく際立てている。

その奥では、触れれば折れてしまいそうなほどか細い腰を覆う、ダークシルクのショーツまでが丸見えになっていた。

「うつつひよおっ！ すげえっ！ こんな色っぺえ脚、初めて見たぜ」

「お、おい、色つぼいとか言うなよ……。ま、蘭ちゃんはそこの援交女とは違うんだ。き、綺麗な脚だけ……。この細くて、子供つぼいのがいいんじゃないか……」

周りで男たちがより一層盛り上がり、野卑な嬌声をあげる。

艶かしさと未成熟な可愛らしさ。戦闘員たちの間でその二点のどちらが魅力的かと口論を起す者がいるが、いずれ『両方』という結論に行き着くだろう。ひどく華奢で幼い印象が強いのだが、黒いソックスとピンヒールが、大人つぼさを演出していた。

「……つつ……」

顔を青くした少女は男たちの異常性に完全に気おされていた。やはり潔癖な性質がそうさせるのか、薄汚い大人を前に怯えを隠すことができないでいる。

(……由良……、お姉ちゃん……)

普段はしつかり者の彼女だが、心の中では常に同じ血と肉と顔を持つ姉を頼りにして、無意識に心の中で助けを求めている。それほどに闇色の潔癖症ドクターは、この場を覆う汚らわしい空気を恐怖していた。だがそうした怯えた態度は、普段のクールで理知的な少女を知る文哉にとって何よりのカンフル剤となっている。鼻の穴をいつもの二倍ほどに膨らませながら、男は一気に小さな腰を覆う最後の砦に手をかけた。

「さあ……。世紀の瞬間だよ。——せえのお……」

「や——っ！ だ……っ。やめなさいっ！ この——っ！」

四肢が拘束されており上手く動けないが、腰を捻って何とかむなしい抵抗を試みる繭。だがクルクルと布地の丸められていくスピードが落ち、脱衣の卑猥さが増した以外、さほど効果は望めなかった。ひときわ白く輝く下腹部の優しいラインが覗く。プルプルと柔らかなお尻が波打つに連れ、産毛も生え揃わない丘から、神秘の縦割れが露呈した。

「……あつ、あうう……」

猛烈な恥ずかしさと嫌悪感。そして不潔さに、悲鳴もあげられない少女。

対してそれまで卑猥に騒いでいた男たちは、突如としてシーンと静まり返り、声もあげられず乙女の純潔部に視線を注いだ。色素のほとんど感じられない真っ白な柔肌が、視線に犯される恥ずかしさから桃色に染まっている。とくに中心でぶにと愛らしく閉じ合わさった聖溝は、内側から朱色をした肉がかすかに顔を覗かせている。まだ黒くも染まらない薄茶色の産毛が卑猥なアクセントになっていた。

男たちは目をひん剥いて、時おりお互いに顔を見合わせては、憧れの少女が見せるはしたない姿を脳裏に焼きつけた。カメラや携帯電話等の録画機材は、持ち合わせていないのか、取り出すのも忘れているのか。

「……う……つ。うあ……あつ。——由良……、由良あ……」

おぞましさを見失うほどの情けなさや体内からこみ上げて、繭は姉に助けを求めながら、その冷たい黒色の瞳からポロポロと大粒の涙をこぼした。普段は表情の変化さえめつたに

見せない女医の泣き顔。それは邪恋に狂った男たちからも同情を誘ったらしい。数人が動揺したようにその美しい涙から目をそらした。

だがそんな中、その愛らしすぎる仕草に対し、嗜虐的な性欲を芽生えさせた男が一人。「えへっ。うへへ……」。泣いちゃった。泣かせちゃったよ。あの繭ちゃんを……」

抵抗力をなくしぐったりと脱力した脚からショーツを抜き取って、クンクンと残り香を嗅ぐ名誉会長だけが、下劣な形相を強めている。少女が清潔好きなことに加え、お風呂に入ったあとで替えたばかりの下着からはさほど強い匂いはしない。だがかすかに感じられる、幼さという名の甘酸っぱい体臭に、男は身を焦がした。

「おい——。名誉会長、もういい。種を埋め込む準備だ」

入会動機が『謎の双子姉のお尻に踏みつけられたから』という人一倍歪んだ文哉と違い、他の純粋な憧れを抱いていた男たちに動揺が広がるのを見たのだろう。プリンス・デュマは戦闘員たちの造反を恐れ、早めに事をなそうと前に進み出た。

舌打ちした会長が離れるとともに、プリンスが繭の広げたままの脚の間に膝をつく。タキシードズボンの前を開くと、少女より一つ上なだけという年には不相応の巨大なペニスを取り出した。保健の授業で別室に移されたとき女子だけが見せられた、スライド写真の中のものが腰へと近づいてくるのを見て、繭は肩を震わせる。直に見せられた生肉は、以前に写真で見たものとは比べ物にならないほど大きく、少女の身をすくませる。全体が火

傷した皮膚のように赤黒く、ところどころ青い血管が浮き出ていた。先端の亀頭は泡立った汁気でねっとり濡れており、その不潔さは、見ているだけで息が詰まるほどだった。

「そつ、それ……、それ——……」

すつかり弱々しくなつてしまつた少女は目に涙を浮かべる。

「貴様は我らマカイジユの手で、女にする」

「——つっ！」

最も恐れていた事態を口頭で告げられ、絶句することしかできない繭。

「我らの血を注がれた者は、二度と清らかな心と身体には戻れぬ。身体に染み込んだ闇の遺伝子がお前を変えるだろう。我らの眷属として。我らの従属者として」

「じゅうぞ……。——いつ、いやよッ！ 誰がつき従うのですかっ！」

「すぐに分かる——。純粹でいるうちは得られない、闇に堕ちることの快樂がな」

言いながら仰向けに寝かされた少女へと腕立てをするような格好で伸しかかってきたプリンスは、腰を前へと進めた。

「ヒッ——っ！」

脚の付け根へとオスの汚らしい熱が触れるのを感じ、繭はゾワワツと全身に総毛立つような鳥肌を立てる。ごくごく狭い肉の合わせ目に、彼女自身の腕ほどもありそうな太さの先端部が無理やり頭を潜らせてきた。そうして綺麗な部位に汚いものが触れるだけで、潔

癩症のドクターはおぞまじさに身悶えしている。

溝は狭すぎて侵入者を頑なに拒んでいるが、冷酷なまでの強引さによつて着実にめり込みだしていた。猛々しい勃起力で凄まじい硬さを誇る王子の分身は、一度入り込めばどんなに狭い道であろうと押し戻されぬ傲慢さを持っている。性に関して知識としてしか知らない未通の少女は、聖域がこじ開けられていく感覚に、頭が真っ白になっていた。

(あつ……つ、うあつ。裂ける……うつ。裂けちゃううつ)

「……おおうつ。ヒヒヒ、みんな見ろよ。ハマるハマる」

喉奥から呻き声を起し苦しむ女医の様子に、文哉が喝采を浴びせた。

下腹部に刃物で刺される鋭いものと、重い何かで叩かれる鈍いもの。両方の痛みが混じりあつて、繭は全身を力^{りき}ませている。両手両足の束縛をこれまでと違う意味で鬱陶しく思った。身体を動かして痛みをごまかさないと気が変になりそうなのだ。せめて首をポンプと横に振った。床に広がった長い髪からシャンプー直後の甘い香りが立ちのぼる。

「——うあうツツ！」

不意に黒衣をまとった幼い身体が、背の折れそうなほど鋭く仰け反った。

じつくりと時間をかけ進んできたオスが、ついに肉の輪を貫いたのだ。

いかにも未成熟で、邪悪な棒の挟り込んだ部位以外からは内側の覗けないほど、ぴつちりと口を閉じた桃唇から、ジクジクと真っ赤な血が染み出してくる。

肉棒を引きちぎりそうな媚肉の緊縮力に、デュマもまた顔を真っ赤にしていた。

まろやかな雪肌。黒髪の甘い香り。汗の匂いを味わいながら処女粘膜を余すことなく抉りぬく。みつしりと弾力の敷き詰まった肉壁に神経の集まった亀頭が擦れる感触。嗜虐の極地ともいえる喜びに、少年は相好を崩す。

「……っつ、……ゆ、許さない……。こんな痛い……。こんな汚いの——」

激痛で表情を歪める中、少女は伸しかかる銀髪の少年を、精一杯の憎悪を込め睨みつけた。同じ顔立ちでも由良には決してできないだろう目で。

「——仕方ないだろう。計画通りにいけばお前も、由良も、私に恋心を抱くはずだった。恋が叶ったと思いつつ闇に染まるはずだった。——だが由良はああも容易く誘引できたのに、お前が警戒を崩さなかったから、計画は変更されたのだ」

「……なに……?」

痛みではつきりと働く明晰な頭でも、繭は一瞬、少年自身の口から告げられた信じがたい事実を、察することができないでいた。

プリンスがゆつくりと顔を近づけてくる。見覚えのある顔を……。

「まさか……。あなた。せ、せん——」

「由良ちゃんに教えておいてあげてよ。初恋は、実らないものだって。ね」

双子にとって学校で聞きなれた口調で裏切りを明確にしたプリンスは、人間界にて櫻時

帝魔と名乗っていた少年は、彼に好意を寄せる少女の妹の唇を、自らのそれでふさいだ。

さらに奥深くへと剛杭がめり込み、メギツと凄まじい肉のきしみが繭の中心部を襲う。

「~~~~~ツツ!! ——つ、ツツ!」

全身に不快げな身悶えを起こす他、唇をふさがれていては悲鳴を発することもできない。腹部が押しつぶされるような激痛があったが、それよりも姉の思い人が自分と、そして姉を裏切ったショックが大きかった。

「つく……。出るぞ……。これが闇の洗礼だ——!」

少女のファーストキスを奪いながら闇の貴公子が、下身をのたうたせる少女の肉をしつかと抱きすくめた。幼壺の底まで達するよう砲身を捻じ込み、血にぬめるそこへと、淫欲のほとばしりを放つ。

「……………くんつ……。どくんつ……。どくンン……。つ。」

妹は奈落へと転落していくような気分で、失神に近い感覚を覚えていた。

口付けを奪われ、破瓜を散らされ、容赦なく膣内に射精され。幼い少女では錯乱状態に追い込まれても仕方のない汚辱の連続。さすがの繭もぐったりとなつて、プリンスが離れるとともに四肢を解放されても、浅く呼吸するばかりで。ピクリとも動こうとしなかった。

狭すぎる膣道は、奥部で放たれた幾億もの異物を、収縮しながらこぼっこぼつと吐き出



している。腿に血色の筋が走る痛々しい光景で、周りの男たちの目には同情が色濃いが、それでも下劣な欲望は生じるらしく無防備に開かれた脚の間に全員の視線が集中していた。「——名誉会長……。苗床は整えた。種を植えつける」

柔軟性があるというだけで血液以外の水分が皆無だった箇所に擦りつけていたのである。亀頭がヒリヒリするらしく腰をかめ気味で立ち上がったプリンスが指示を出した。

そんな彼に——。低い呻き声で訴える繭。

「く……っ。ううう……。ど……、してっ」

腰がズキズキして身体に力が入らない。潔癖なプライドで涙だけは二度と流さないが、がつくりと首をうな垂れて目を伏せるその様は、泣いている子供そのものだった。

「……どうして——っ。どうして由良を裏切るの……っ」

デユマに。櫻時帝魔だった男に聞こえるだけの声で言う。

屈辱に埋め尽くされたこの状況で、そのことが何よりも悔しかった。

自分の身体のことならば諦めがつく。我慢すればいいと思えるほどドライではないが、汚^がされようと痛めつけられようと、クールな人格までは変えられていない。

だが由良のことは。姉のことだけは、冷静になど捉えられなかった。

天使のように優しく、無邪気で、一緒にいるだけで幸せになれる。世界で一番の姉。

誰よりも愛しい彼女の思いを。初恋を裏切ったことは絶対に許せなかった。愛する人を

思う嫉妬もあつたのだろう、破瓜を散らされ衰弱しきつた状況にもかかわらず、繭はこれまでで最も強烈な敵意を込め、背を向けたプリンスを睨んだ。

「許さない……。絶対——、許さないから——」

「……ふふ、まあまあ繭ちゃん。そんなにエキサイトしないで」

背を向けたプリンスはもちろん、辺りにいる戦闘員たちにさえ血も凍るような緊張感を与える繭に対し、文哉だけが緊張感のない声で呼びかけた。

「プリンスに生意気言っちゃダメだよ。繭ちゃんもこれからは手下になるんだから」先ほどプリンスの命令を受けた名誉会長が近づいてくる。

「——なに……？」

小太りなアニメオタクの与太話かと思われたが、嫌な予感がした少女は鋭い眼光を向ける相手を、接近する彼に変えた。

「頭に血が上つてるけど、これをあげるから大丈夫。すぐに何も考えられなくなるよ」

ニタニタといつもの、見ているだけで不快さを覚える笑みを浮かべた彼が手にしていたものは——。二センチ程度の球体。くるみの実のようにでこぼこして、しかし生きているかのように生々しい光沢を放ちつつドクンドクンと脈のような鼓動を見せている……。

「……黒い快楽を求める以外、何もね……」

第五章 ルナティック ～狂愛する姉妹～

自分の身が汚されたことで、逆に最愛の妹を汚してしまったような気がした。それが無性に悲しい。

「由良——。泣いてるの？ 痛いのか？」

だが姉の涙を見つけたことで妹は、彼女を愛するがゆえにさらなる残酷な決断を下した。「待つて。すぐに気持ちよくなるから。絶対にあたしが気持ちよくしてあげるから」

ずぶずぶと時間をかけて結合はとうとう最奥まで達する。

「うあ……っ。あああつ。あああああああつ……！」

先端の糸体積が多い部分はよかったが、根元にいくほど硬い幹枝の体積が増え、いまでは筒道の入り口付近は、双子の手首ほどの太さにまで拡張されている。

だがそれほど酷な仕打ちを受けても、由良が激痛に泣き叫ばずにすむのは、ひとえに妹の入念な気遣いのおかげだった。

肩に抱いた右足の腿が由良自身の腹部につくほど、繭は身体を前のめりに倒し、由良の上体に指戯を施している。白衣の下のシャツをめくると、弱点の乳首をクリクリ転がし、その間もじつくりと腰を回して狭い乙女穴を拡張するのだ。

ナースのスーツに女医のジャケットが擦りつく動きの、ごく細かな振動が、ゆつくりと、ゆつくりと粘膜管を搔きほぐす。

「気持ちいい？ ね、気持ちよくなってきた？ 由良」

「う……。ち、ちが……っ」

恥ずかしそうに両目を伏せてそっぽを向き、床におでこを擦りつける由良。前髪に引っかけたナースキャップの奥では、赤い顔から痛苦の色がほとんど消えているのが見て取れた。

それも仕方のないことで、処女だったとはいえ由良の肉はすでに魔種根によって子宮の程近くまで快楽の味を覚えさせられている。妹の剛幹はそうした繊細な筆の感触を持ちながら、ぐいぐいと果肉全体に強大な重量感を与えてくるのだ。凄まじい異物感に慣れが生じるに連れ、肉輪が破られたばかりの純情孔は甘く蕩けていく。

「うっ、うううう……。やめて、繭ちゃん——。もう、もう動かさないで……」

破瓜を散らされたときも大人しくしていた姉が、抵抗の色を示しだした。

痛みを少しでも消そうとする繭の愛撫はとにかく献身的だ。ねちっこく乳房を揉み、乳首を指の腹で擦りつつ、時間をかけて蜜壺を攪拌する。

最愛の妹が相手なのだ。痛みならばどれだけでも我慢するつもりだったが、生じ始めた悦びの予兆は耐えられるものではなかった。繊毛亀頭にジャリジャリ刺激され、たこの吸盤状の子宮口が蠢く。そのたびに割れ目の浅いところでも、異物幹を咀嚼するよう幼いひだがキュッキュツと窄まった。

子供用のパンツを愛用していても違和感がないほど幼い肉付きの腰が、無意識にうねって大人の腰遣いを見せる。

(も、もう私の身体、おかしいよお。繭ちゃんに犯されてるのに、こんなにたくさん男の人に見られてるのに……。どうして、こんなにも……)

桜色の割れ目がぐっしょり濡れているところを、二百の男たちに丸ごと見られている。だが痛いほどに視線が集まる大股開きの箇所には、なぜか溶岩のようにドロドロした炎が渦巻いた。あまりの熱さに身体の芯が痺れ脚を閉じようという気も起こらない。

男たちの視線はみな卒倒寸前なほど血走っていた。憧れの双子が繋がり合って熱く吐息を絡ませる宴を前にしては当然か。白と黒のスカートが絡み合って、小さなお尻が合わさり揉み潰しあう光景がしつかり見て取れる。二人が蠢くたび、繭のさらさらの黒髪が流れ、由良の可愛いポニーテールが揺れる光景は、幼さが演出する妖艶ステージだった。

「おい見ろよ。由良ちゃんも感じだしてるぜ。まだロストバージンしたばつかなのに」
「やつぱそつくりだな。由良ちゃんと繭ちゃん、まったく同じ顔して喘いでるぜ」

「ひ……っ、やつ、みなっ、見ないで……」

周りの男たちがひそひそ声で言い合っている言葉が耳に届き、由良は泣きそうなくらいに顔をくしゃくしゃにした。

しかし泣きそうな顔で耐えているか、微笑を浮かべ堪能しているかの違いだけで、姉妹

の表情は男らの言う通り同様の紅を湛えている。

下腹部の雌道を抉る魔種のザラつきが、間断のない喜悦を呼び起こす。あどけなさを共有した双子の顔にさす官能は、すでに大人びて見えるほど色濃かった。

「あいつらの言う通りだよ由良……っ。セックスで感じてるでしょっ？ うううっ、あたしも感じるっ。い、イツちゃいそうなくらいっ、由良のおま○こがキュウキュウしてるの感じるうっ！」

自分の分身である姉を追い詰めるごとに吐息を甘く荒げながら、妹は彼女の太腿に抱きつき、これ以上ないところまで腰を密着させた。

「かつ、感じてないようっ。……感じてな……——いあっ。ふやああああつっ……っ！」
内側のひだひだが、硬い幹に限界まで突っ張らされて、同時に細かい毛で一斉に擦られる。

（あああああ……っ。いつ、いつ。なにこれ——。なにこれ——っ）

純潔を失った代償に刻まれる女の肉悦——。そのあまりの凄まじさに、幼い由良は瞳を見開いて総身をわななかせた。

（ふと……っ、おっ。——壊れちゃうっ。おなかつ、お腹こわれちゃうっ！）

子宮口までザラつく幹棒が達し、悦びの電気粒がピリピリと下腹部を駆け巡った。痺れるような快感に膣肉が反応し、キュッと妹のペニスを包み込む。

「ああああ……ううっ！ い、いきそ……。由良……、お姉ちゃあんっ」

姉肉の甘美すぎる粘膜が剛棒を巻く糸を締めつけたことで、それに連なつた根毛に膣道を挟まれ、繭は姉の腿にまたがった肢体を弓なりに仰け反らせた。

「イク——ッ。イクよつ。あたしもうイクっ。く——ッ、ううう……ッ！」
瞬間——。由良の中で、限界まで粘膜を引きつらせた巨異物が、さらに膨張する。

——くくどぶうんっ……！！

「かひや……っ。うあ!! ——で、出て——。なに!! 何かっ、でてるううっつ！」

——ごぼぼっ！ どぼるっ！ ごぶっ、ごぶっつ！

生暖かいエキスがお腹の内側で弾けているのを感じ、由良もまた身を引きつらせた。男性器と違い射出口がない分、亀頭にあたる格子状の毛玉の内側から、全方向へとドロついた粘液が放たれていた。

液体という痛みは伴わない感触が膣道を満たし、そして子宮を挟る。初めての感覚。由良は身体に震えが来るほどの興奮を覚えた。

「あああ……っ。な、なかにいつぱいつ、いつぱいつ。すごいっ。もうだめエ！」

長いポニーテールを打ち振って身をそり返らせる由良。

「由良っ、気持ちいい——。とまらないっ！ イクのっ、イクのとまらないっ！」
本来は男性の悦びである放出快樂に打ちひしがれ繭は全身を悶えさせていた。正座して



痺れた足をつついたときの、粒子が破裂するような痛み混じりの快感が、腰の付け根で集中して起こっている。意識が混濁するほどの連続絶頂に飲まれ、大きく身体をしならせた。

その拍子に肩にかけていた由良の右脚が外れ、密着していた腰が離れる。

「あつ、待って繭ちゃんつ。いま抜いたらつ、いま抜い——つ。——ひふ——！」

まだ少し破瓜血が残るほど初々しい肉道は狭すぎるだけに、近づこうとする力が消える
と一気に握っていた異物を吐き出した。

「ふあああ……つ！ あ——つ、あつ、あ——つ、い——」

熱いエキスを吐き続けるザラザラの亀頭が、敏感な粘膜をかきむしる。

興奮と喜悦の極地で、由良は頭が真っ白になりながら肢体をよじらせた。そして——。

「い——つ、くうう——ッッ！」

最後に細腰は大きく跳ね、ブリッジでもするよう仰け反る。

——ぶちゅしゅつ！ ぢゅぶぶつ！

剛幹が抜け落ちると同時に絶頂へと達した姉の狭い膣道から、宙に向け湯気をたてるほど熱したエキスが放たれた。

二度目の膣吹き——。

「ああああ……。あ——。あああ……」

その汁の大部分を占める、妹の中出し液が、まだ密着している下腹へと降り注いだ。

第六章 メイクラブシンドローム ～密月中毒の花嫁～

——ちゅむっ。にゅる……っ。にゅむむむ……。

本当に人間の一部分かと思うほど硬い感触を感じながら、舌で幹全体を汚す粘液を拭っていく。

抗えない——。二百人の体液がもたらす洗脳の残滓は、まだ由良の中にしつかりと息づいていた。卑猥な愛情を脳裏に刻みつけてくるその液体を口に含むことに、ほとんど嫌悪の意識が湧かない。それどころか……。

（ああ……。舌から、口の中から響いてくる——。お兄ちゃんが私を『好き』だって気持ち。すごい……。すごい強い——）

これまでの二百人が一人として持たなかったほどの愛情が、テレパシーのように伝わってくるのを感じた。謎のナースユラも、マンションの名物双子十萌由良も、どちらにも邪恋を抱く彼だからこそ、強大な洗脳エキスが、喉を通って少女の肉体に染み込んでいく（やだ……。こんな汚いの舐めて、飲んじやつて。なのに……。もっと欲しいって——）

恥じらいに身を軽く震わせる少女だが、どんなに理性が警鐘を鳴らしても、もはやエキスへの嫌悪は欠片も感じられなかった。むしろヌルヌルが肌を滑り、異臭に肺が焦がされると、ゾクゾクするような興奮にかられる。

「お、おい。会長。ずるいつすよ一人だけ」

「そうだ、あんたが破るなら俺たちだっけって誓いを守る義理はないぜ」

主たるプリンスは別格として、リーダーとはいえ誓約者の一員のペニスに、ピンク色をした幼い舌が這っているのだ。周りの男たちが不満をもらしだした。

「それなら全員で使えばよいだろう。つまらぬことで言い争いはよせ」

二百人の反意を鎮圧できるカリスマを持たない文哉に替わり、プリンスが動く。射精感の高ぶりにこらえるため額にかいた汗を拭いながら、お尻を抱えていた両手を少女の胸に伸ばした。押さえていた男たちに四肢を解放させ、結合したままでその場に腰を下ろす。

「ひゃい……っ、く——」

あぐらをかいた憧れの先輩の上に、正座姿勢でまたがる由良。

姿勢が入れ替わったせいで深々と子宮を突かれ、同時に尻肉から二本指が一気に引き抜かれたため、低い呻き声がもれた。

重い快楽のもたらすドロつきが溜まりに溜まっている子宮は、体勢の移動で軽くよじれるだけでも嬉しげに引きつるほど敏感になっている。

「この女はまだ怪人化の予定がない、お前たちの慰安奴隷だ。好きに使うがいい」

顔の見えない背後から、好きな人の声が冷酷な言葉を紡ぐ。せめて銀の髪でも目に入れれば楽だったろうに、裏切りのショックが蘇ってきて由良は胸の痛みを覚えた。しかしすぐにも、目の前を埋め尽くす光景に気を回さなければならなくなる。

十人十色の雄肉を掲げファンたちがぞくぞくと集まってきた。

「……くっくっくっ」

マンション隣人をはじめとする二百の男たちが下半身を露出して迫ってくる。あまりの気恥ずかしさに由良は俯いてしまうが——。その表情には、少なからぬ雌の高ぶりが見て取れた。

鼻腔に絡みつく猛烈な淫臭のせいで、肺から背徳の幸福感が沸き起こる。

(臭い……。鼻がヘンになりそう……。でも素敵。気持ちいい匂い)

肺から全身に染み込むような異臭を受け、巨大杭に栓のされた膣道が期待の涎を垂らした。注射された精液混じりのそれはトローツと内腿を伝い、ストライプのソックスに染み込んでいく。

ぼつてりと熱を帯び、半開きで隙だらけになった唇に、すぐさま先頭にいた会長をはじめとする三人が龟头を押しつけてきた。

ゴムシリコンのような微妙な硬さの肉三つが口元を滑る。宮代文哉はもちろんのこと、他の二人も一度射精しているためか、龟头部に大量の精液が付着していた。

「——ひゅく——っ!？」

唇粘膜に、男の邪恋液がぬたくりつけられる。さらに続けて二百の男たちは、一斉に群がりだすと、少女の頬や肩、腋、腿など、白衣がなく素肌の見えている箇所を選んで肉茎を押しあててきた。

(うわああ……っ。か、身体中がっ、お精子で——、お精子でえっ)

嫌悪や気味の悪さが起こって肩を震わせる少女だが、一瞬の後にはそれが異様な興奮に結びついてしまう。子宮で甘い痙攣が生じ、なすがままにされていた膣肉がきゅつと窄まった。ひだ粘膜に絶妙の弾力で肉砲を締められ、亀頭を擦られ、雁首を舐められて、プリンスが呻き声をもらす。

一度に二百人すべてとはさすがにいかないが、それでも十五を越える数の性器が。十五人以上のエキスが天使の肌を汚した。

「うううう~~~~~……っ！ ……~~~~~く……っ、くくううっ」

強烈な昂ぶりに胸を焼かれ由良は激しく嗚咽している。プリンスのリズミカルな腰打ちが会陰部を貫いているため、全身が舞うように妖しく蠢いた。甘い生汗が飛び散り男たちの黒タイツを濡らす。

「うわ……。あの由良ちゃんがこんなエロい顔するなんて」

「可愛いじゃん。目じりに締めりがなくて、口は涎まみれだよ」

「俺は幻滅だぜ。A V嬢でもしねえよ、男のチンポ相手にこんな蕩けた顔」

それぞれに好き勝手なことを言いながら、唇をはじめ耳も頬も、汗でぬるつく首筋さえ使って、自らをしごく男たち。

「いや……っ。いやですっ。見ないでっ、言わないで——。あくうううんっ！」

白衣を着た哀れな獲物をいぶし、肉牝へ墮とそうとする炎は、そうして外皮を炙りながらも、内側から過酷に攻め入ってくる。

「顔つきだけではない。……こ、こちらの反応も……、ずいぶんと高まっている……」

彼にとつても急所である肉杭を納めた蜜肉道の反応がさらに極まったことで、プリンスの声はもう隠しきれないほど上ずっていた。複雑なひだひだが一秒として同じ場所にいまいほど激しく流動しているのだ。おへそ側のザラザラが裏筋の雁部に擦れてたまらない。それにうねるだけでなく、上下に引きつるような反応もあつて、エキスを吐き出す鈴口が吸引されているようだった。

ハアツハアツと中性的な顔立ちに似合わない、雄そのものの荒い息を吐きながら少年は、軽量のナースを乗せたまま背をそらせて腰を持ち上げた。ずいぶんとくつろげられてもまだ狭い穴の最奥へと亀頭が密着し、リング状の子宮口を拡げるよう深くゆつたりとかき回す。

「ひあ——っ。先輩っ、やめっ。そ、それっ、だめですうっ！」

さらに胸に置かれていた手も乳肉を這い、滑らかな肌を外から中央の突起に向けて、さするよう揉みまさぐってきた。さらに——。

——じゅぶっ！　じゅぶっ、ずちゅっ。ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅッ！

胸にいたずらしながらも女体の性感を心得た壺撃ちは休まない。

「はうっ。はお……っ。あおおおんっ！ ひうんっ、ひんっ、ひいんっ！」

勢いに任せた繭の突き方とはまるで違う、重量感のある悦びが子宮に響き、幼い少女は痛切な屈辱感に打ち震えた。切なげな目を肩越しのプリンスに向ける。

（ううう……っ。ずーんって……、感じ……。こ、こんなに……っ）

敏感な肌を擦られるだけではない。重量感のあるパルスは、少女の肉に奥行きのある、逃げがたい快楽をもたらした。

「卑猥でだらしない顔になってきたな。——目に少し、理性が残っているが」

「え——？ や……、やあっ。見ないでください」

そう言われ、由良は自分の口元がいま精液でべつたりになっていることを思い出した。しかし拭おうにも両の腕は腋に肉を挟ませた男たちが動かしてくれない。

「見るな？ お前の肉はもう従順になっているが？」

魔王子の腰使いが誘引を帯びた緩慢なそれから、次第に乱雑な攪拌運動に移りだした。

じゅぶツツじゅぶぶツと股穴から響く粘質音が、さらに音量と卑猥さを増した。膣道全体がじつくり官能に馴染まされるとともに、まだ処女の初心さや色合いはまったく薄れない聖裂が陰毛でかきむしられる。

「ふきう——ツツ！ き……っ、いあああああんっ」

浅瀬をかき混ぜられる鋭い快感と、子宮を圧される鈍い悦びが肉を貫き、由良は鼻先か

らどうしようもなく甘い嬌声をもらした。

「やめてっ。あんっ、やめてください先輩。恥ずかしいっ、ああ、あああんっ。恥ずかしいんですっ」

性の喜びは肌の上にぬるぬる邪恋エキスを擦りつけられる幸福感と連結すると、もう止まらない。

「あい……っ。いいいいい……っ」

「すげえ声。この年で、こんな派手な声で喘いでるぜ」

「見ろよこのジュース。おもらしでもしたみたいに床に垂れまくってる」

「うう……。言わないで。恥ずかしいようっ。言わないでえっ」

内側にまで粘液を塗られる可憐な唇から、ひっきりなしに羞恥と、鈍い喜びの音色がほとばしった。

全身が異性という未知に支配されているのが分かった。女である自分はどんどん希薄で曖昧になり、男たちの望む淫らな存在へと変えられていく。

そう意識するとタイトなナーススーツに包まれたスレンダーボディが、子供とは思えないほど悩ましくくねった。

「そろそろだ……。お前が堕ちた瞬間、奥に私のものを注ぎ込もう——」

「うあ……。っ。い、イヤ——。いま、いま先輩の愛も……。っ、出されたら……。っ」

「——まだイヤなどと言えるのか」

ポニーテールの黒髪が踊り狂うほど首を横に振る少女に対し、男は攪拌に合わせ実に繊細な震動を加えてきた。

極太の味が膾肉に、子宮に、恥骨の髓にまで染み込んでいく。

「だ……っ、だされ……っ、出し……」

一時間前までの処女は猛烈な官能酔いを起こし、ぶるぶると汗の滲んだ全身を震わせている。

慰安奴隷——。プリンスに言われた言葉がよみがえった。

しかしその言葉に対していまの由良は、恥辱感こそあれ、嫌悪の意識が湧かないでいる。
(慰安——、奴隷——っ。みんなから……、可愛がられ……、て……っ)

身体の中央に聳える剛直に。身体にぬたくりつけられる雄たちの熱さ一つ一つに。奴隷めいた服従の意識が燃え上がった。

股の奥では熱い粘膜が、初恋の相手にして怨敵の膾肉を、ぐちゅぐちゅと咀嚼するように蠢きながら一分の隙もなく絡みついていく。

「へへ……。由良ちゃん。おま○こが新しい精液欲しいって、こんなに大泣きしてるよ」

「ふくっ。あつ、あひやああああ……っ。やつ、お兄ちゃんっ。言っちゃやアっ」

「素直にプリンスにおねだりしなよ」

文哉の言う通り、正座した慰安ナースから床に垂れ落ちる汁気の量は、あれだけ注射された精液が薄まるほどだった。

半分以上は少女の蜜が混じっているのが見て取れる。

「は——っ、あはっ、おねだり……。おねだりって——」

目を涙で潤めた天使は、自分を裏切った男へのおねだりが、どんなに甘美な結果をもたらずか意識してしまう。

「~~~~っつ……。あう……、ううう。おねだり……い」

いったんその誘惑にかられると、芽生えだした奴隷思考が逃がしてくれない。知らず知らず清楚な唇が開かれた。

「……………ほ……し……。い」

か細い喉から震える言葉が紡がれる。

「……欲しい……。……うあぁっ、恥ずかしいっ」

辛そうに目を伏せながらも、すでに精液に対しては嫌悪どころか、求める思いが抑えきれなかった。

眼前に向けられた無数の肉幹たちに向け、おずおずと舌が伸びる。

小さな桃色の舌先が一番近くにあったペニスの先端に触れ、全体をヌメヌメと覆っている白濁膜を舐め拭った。凄まじい臭素が口のほうから鼻腔を捉える。舌の上から一挙に口

内全体へとしよっぱさが広がると、つい先ほどまで処女だった幼天使は、ほとんど逡巡も見せず喉を鳴らして、唾液に絡んだ牡種を呑んだ。

(んふう……っ。ふあっ、お、お精子っ、お精子いつ。飲んでるっ)

イガイガしてしよっぱい舌触りと濃密な悪臭が、少女の理性をさらに蕩かす。

「ああ……。くさあ……。おせいしっ、すごいにおいつ。くさいいつ」

鼻も口もその恐ろしく濃い異臭に支配され、だが由良は、不潔さよりも無性に沸き立つ陶酔感に震えていた。臭いの、汚いの、もっと肺をこの匂いでいっぱいになりたい。肺から吸収された臭素が血液に乗って全身に染み込むのが待ち遠しかった。

ナスはその見る人を和ませる愛らしくも清純な面立ちを、うつとりと緩め、牡汁の沸き立つ亀頭の縦割れ尿口に吸いついた。ちゅぷちゅぷと夏場の犬が水分を貪るよう、めいっばい舌を動かして尿道からエキスの残滓を舐め取り、飲み干す。

頼りがいのある凝固肉が、ピキッピキッと脈動しているのが舌からはつきり感じ取れた。(にやああん……。熱い、硬い……。おちんちん……。すぐくっ、すぐくっ、すぐくっ)

水晶のように美しい黒眼が、周りの男たちに甘えるような視線を向けた。

牝猫がするような発情の視線……。それは最後に、後方にいる初恋の、そして裏切りの美少年へと向けられる。

「ふあはあっ、先輩……。先輩っ、注いでくださいっ。先輩のお精子、くださあいつ！」

最果ての予兆に胸を高鳴らせ、天使は声高に叫ぶ。正座姿勢なため両膝に力を込めて、スカートから丸出しにしているお尻をプリプリと振りたくった。蒸れた谷間に、中央にある肛沼の肉に、陰毛が擦れるのが嬉しくてたまらない。

「……いいだろう……。——そらっ！」

こちらも余裕はなく、少年は顔を歪ませながら下腹部のトリガーを絞った。

限界まで天使の内側を押し広げていた剛直が、さらに一回り大きさを増す。それに合わせて弄くられていた胸肉の先端突起が、強く捻りあげられた。

「——っつっつきはあああああ……っつ」

過敏な乳首からの衝撃と、裂けるギリギリまで開かれた股肉からの衝撃に身を貫かれた瞬間、内側で生暖かい汁気が爆ぜる。

「……っつっつあああああああああああ……っつ！」

——ドクククッ！……どくつ、——どくんっ！どくつ、どくつ……。

最愛の人の洗脳汚液が身に染み込み吸収されていく——。由良は上ずった悲鳴をあげながら相手に合わせるよう一気にエクスタシーを迎えた。

溜まりに溜まった重い快樂のドロつきが子宮から一気に開放される。それは急激にオルガスムスの加速剤へと変化し、妹相手に覚えた高みの、さらにその向こうまで突き上げられてしまう。



「ひああああああつ、あはうつ、あはあああああつ」

重量感に満ちた絶頂はこれまで身に刻まれたものとは別種で、天使は断続的に咆哮しながら、がくつがくつと上体をのたうたせた。その愛らしい顔が法悦に歪む。

「うあ——つ。ゆ、由良ちゃんがイッてる——」

「すげ……。こんなやらしい顔つ。くそつ。もう我慢できるかつ」

子宮にだくだくと注がれる愉悦水と、肋骨まで性感帯になったような上半身の官能に、叫びながらアクメを食う獣と化した天使。

そのあまりに淫らな喘ぎに引きずられ、周りの男たちもまた一気に暴発していった。とくに少女の身体に押しつけられた亀頭たちは例外なく濃厚な洗脳汁の引き金を引く。

「————ンぶつ……。つくはつ、~~~~~~~~~~~~つっ！」

口腔へと文哉のエキスが流し込まれたのをきっかけとして、少女は顔面を中心に身体中で濁液を受け止めることとなった。

（ああああ……。こんなに、こんなにいっぱい……。お精子……）

その間中、果てついた先のさらに果てを極めながら、少女はどうしようもない至福に身を委ねている。

無残に初恋を散らされたことも、身を汚されゆくことも、すべてが甘い恍惚の中に閉ざされた。そうして墮ちた天使は、喉を鳴らして文哉の種汁をすべて飲み干したあとも、顔

にかかるとエキスを舌で舐め取っていく……。

☆

甚振りを終えたプリンスが玉座に戻ったことで、由良は力なく正座姿勢のまま蹲ってしまった。二百いる男たちはまだ大半が満足していないし、いまこのときも射精を終えたほとんどの者が着々と勃起を取り戻している。

「由良……」

そんな熱気渦巻く人垣を押し分け、目を覚ました妹が姉のもとへと駆け寄った。

「ま、繭ちゃん……。あ……」

疲労困憊してろくに身体の動かない由良に、繭は有無を言わず唇を奪う。

「——浮気者。見てたよ、あたしとしてるときより気持ちよさそうな顔してた」

「そ、そんな……」

確かに粘液まみれの絶頂は、繭とのロストバージンでは得られなかったほどの悦びに満たされていたため、なんといいか分からず口ごもる由良。

「許さないから。由良を一番気持ちよくさせるのは——、あたし」

大量に飲まれた男の種汁で異臭に染まった姉の口腔をちゅぷちゅぷ洗浄しながら、妹は白い糸が無数絡みついた魔界樹の幹男根を掲げた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)



全国書店で
好評発売中



**少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!**
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

思春期なアダム4 聖域の崩壊
[小説: さかき傘 / 挿絵: 天海雪乃]



呪詛喰らい師2
[小説: 蒼井村正 / 挿絵: 或十せねか]

全国書店で
好評発売中



全国書店で
好評発売中



**クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?**
ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

魔海少女ルルイエール2
[小説: 羽沢向 / 挿絵: ヒエール☆よしお]

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!**

既刊LINEUP

- 仙界学園戦姫 / プナガッ! ①~③
- ビルグリムメイデン ①~④
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです
- 借金お嬢 크리스 ①~③
- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
- 宇田海賊学園 ブラックキャット



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリエ

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!